

## 南タイ農村の発展史的把握 (1)

——派生村形成の社会過程——

矢 野 暢\*

### Social Processes of “Baan-mai” Formation in Southern Thailand

——An Observation on a Thai-Islam Community——

by

Toru YANO

This is the fifth of the serial articles titled “Socio-Economic Basis of Social Communication in Southern Thailand.”

The main aim of this article is to present an analytical view on the social processes of “Baan-mai formation” in a Thai-Islam community in Southern Thailand.

This article also incidentally aims to propose a hypothetical method to reproduce the history of a village in Thailand.

One of the basic characteristics of a Thai village is that, through the familiar habit of squatting ownerless land, new hamlets are easily formed inside or outside the original village boundary. It is, in a sense, a social mechanism by which a good balance is constantly achieved between population and land holding. This sequence of “baan-mai formation” is one of the basic themes of the history of a Thai village. The easiness of the “baan-mai formation” has long functioned to obscure the actual extent and range of a village community in Thailand as well as to keep the Thai social structure fairly loose.

In the village of Don-Khilek, where the author conducted a field survey on the subject, the “baan-mai” formation has taken place in three different waves at three different junctions in the course of its history. Don-Khilek originally consisted of a single hamlet, but it has produced seven or eight different hamlets in the past eighty years.

The phenomenon of “baan-mai” formation has to be analyzed in a two-partite way; that is, the physical process of a new hamlet formation on the one hand, and the social process of separation of community activities like religious rituals, on the other.

### は じ め に

本論文の目的は、タイ国農村一般の村落発展史を解明する手掛りを求めて、南タイの一タイ・イスラム村落を素材に、村落の歴史的発展過程を実証的にあとづけることである。

\* 京都大学東南アジア研究センター

いうまでもなく、タイにおいて、一つ一つの農村の歴史をあとづけるうえで役立つような文献資料は存在しない。そこで、村落の再現には、村落の現実の様相のなかから、参与観察によって、歴史的発展の痕跡を求めることが必要になってくる。それにしても、村落発展の社会過程の総体を過去にさかのぼって再現することはほとんど不可能に等しい。

そのような場合、唯一の可能な方法は、現地社会に働くさまざまな社会法則のうちで比較的生命力の長い法則の発見につとめ、それが社会の変化ないし無変化の契機としてどのように機能しうるかを検討してみることであろう。そのような社会法則は、現在の現地社会にも生きていると同時に、過去の社会でも中心的な社会法則として機能しながら、社会発展の契機として決定的な役割を果たしてきたものである。

タイ・イスラム村落でのケース・スタディがはたしてタイ農村全般についての示唆を与えうるかどうかについてはいささかの疑問が出るかもしれない。ただ、本稿では、タイ特有の土地獲得の慣行である「無断耕作 (cab coong)」現象に着目し、無断耕作を媒介とする集落分岐の過程を歴史的にさかのぼって再現することによって、村落発展のある局面を明らかにするという方法をとっている。つまり本稿での視角は通常のタイ農村を眺めるのと同じ視角なのであって、その意味では、比較的に幅広い妥当性をもつといえよう。

筆者の調査地ドーン・キレクは、周辺を仏教徒部落に囲まれたムスリム部落であるが<sup>1)</sup>、現在五つの集落 (klum) より構成されている。しかし、ドーン・キレクは初めは単一集落よりなる部落であったのであり、それが五つの集落に増え、さらにその後、本来の部落の枠の外にいくつかの派生集落が形成されている事実は注目に値する。このような派生集落の増殖過程そのものが部落の発展史の中心的イシューであり、その過程を論理的に解明することは、村落発展を学ぶ上での有効なアプローチであるといえよう。

この方法を通じて、もう一つの事柄が明らかになる。すなわち、ドーン・キレクを部落の本来の領域内でのみ捉えることは妥当でなく、ドーン・キレクの社会圏は本来の領域を越えてかなり広いひろがりでも成立しているという事実である。通婚圏であれ、なんであれ、ドーン・キレク固有の社会圏のなりたちを理解するためにも、このような派生集落の系統的拡大過程を総合的に捉えておくことはきわめて有効な手続きなのである。

ドーン・キレクからの派生集落分岐の過程を明らかにするにあたって、「無断耕作」の慣行による物理的な集落分岐の過程と併行して、イスラム共同体としての集団儀礼分離の過程も当然に問題になってくる。ここでは、「バライ共同体」の分離および「マサジット共同体」の分離という二つの作業概念を用いるが、それぞれの意味については本文中で追って明らかにしていく予定である。

本稿執筆のためのデータは、1964年から66年にかけての18カ月に及ぶ現地定着調査の期間中

1) ドーン・キレクの態様については拙稿「南タイの土地所有」本誌第4巻第5号所載 pp. 10~12 参照。

および1971年8月のフォロー・アップ調査の際に、ドーン・キレクで行なった各種の調査によって得られたものである。データは、基本的には次の4種にわけられる。

- (1) ドーン・キレクの高年齢村民を対象に行なった、村の歴史について回顧を行なわせる聞きとり調査から得られたもの。インフォーマントは計5名（インフォーマントA102才，B83才，C83才，D79才，E78才）である。
- (2) ドーン・キレクの全296世帯を対象に行なった世帯別の生活史調査，およびドーン・キレクより派生したクロンルクおよびクアンヒン部落の全ムスリム世帯を対象に行なった世帯別の生活史調査のデータ。
- (3) ソンクラー市在住の有識者，とくにソンクラー県イスラム委員会委員長およびソンクラー師範学校教官ピンヨ・チッタム (Pinyo Cittham) 氏の面接データ。
- (4) 本文中に引用するいくつかの文献資料。

いずれにしても，本編は，東南アジアの農村研究でもっとも未開発なテーマの一つである村落史の研究，言葉をかえれば東南アジア農村の歴史学的把握，というテーマについて一つのアプローチを試みるものである。紙幅の都合もあり，全体の叙述がかなり図式的になるのをあらかじめお断りしておく。

## 1 単一集落段階のドーン・キレク

### (1) ドーン・キレクの歴史のはじまり

ドーン・キレクには，南タイのすべてのタイ・イスラム村落と同様に，文字で記された部落の歴史は残されていない。部落や家(いえ)の系譜にほとんどこだわらない住民には，過去の歴史をことさら問題にしようとする性向はほとんどない。それだけに，ドーン・キレクの過去を復元するには多くの困難がつきまとう。

ドーン・キレクがそもそもどのようなプロセスで形成されたか。つまり部落の起源については，幸いにもある種の伝説が今日までいい伝えられてきているので，それにおよその手掛りを求めることができる。ところが，部落の起源についての伝説は二通り伝承されてきている。

第一の伝説（プームアット・ドゥレム Phuumuat Dulem の伝説）：

昔，タイがまだ未統一で，ソンクラーとパターニーとが嫌い①あっていた頃，②パターニー人のドゥレムという男が，③phuu muat としてこの土地に住み着いた。父親が話していたところでは，④四，五代 (chuakhon) 前のことであるという (Inf. B)。

下線を引いた部分は重要な手掛りになるので，あとで分析してみよう。もう一つの伝説はこうである。

第二の伝説（トドゥアヤイ To-dŭa-yai の伝説）：

ドーン・キレクにきた最初の間人は、パターニー人であった。戦争から逃げて来て、この土地に住み着いた。名前をトドゥアヤイと<sup>⑦</sup>いった。この土地は、昔はクルクレク Khluk-lek (「鉄を混ぜ合わせる」の意) と呼ばれたが、それは、その男がナイフやなたを作る名人だったからである。それがやがてドーン・キレクにかわった (Inf. C)。<sup>⑧</sup>

異なった伝説が二通り存在する事実はそのこと自体検討に値するが、その点は問題にしないとして、この二つの伝説に二、三の共通点があるのに注目したい。まず第一に、ドーン・キレクはそもそも住み着いたのが外来者であり、しかもパターニー地方から来た人間であったという点である (下線部分②と⑤)。第二には、その時期はタイ王室とパターニーの地方権力とのあいだに抗争があった時期であり、パターニー側の兵士が戦闘を逃れてこの土地に定着したという点である (下線部分の⑥参照。しかも、下線部分③の phuu muat は「分隊長」を意味

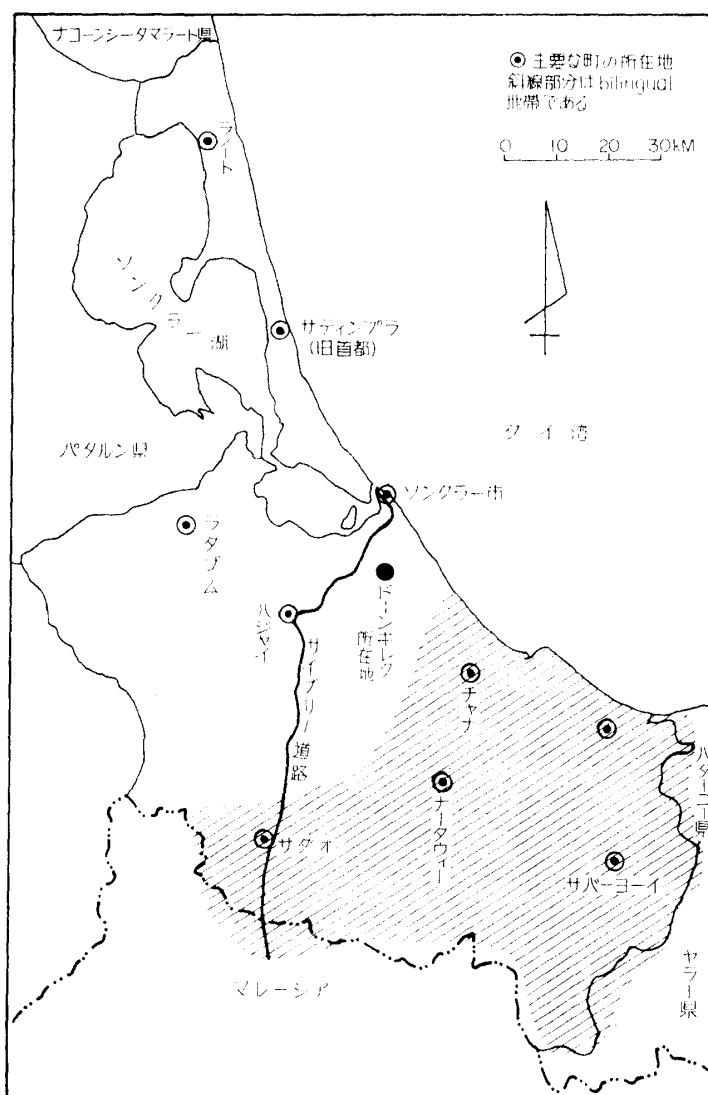


図1 ソンクラ周辺概念図

している。下線部分⑧も、兵士を暗示する)。ただ、最初の移住者の名前が喰い違っている。一方の Dulem は、現在のドーン・キレクに Bindulem という姓を一番多く数える事実と無関係ではなさそうである。1913年にラーマ六世によって姓 (naam-sakun) 制度が導入されたとき<sup>2)</sup>、ドーン・キレク住民も当時の郡役所の命令で姓の使用を始めることになったわけであるが、当時のことはいまではよくはわからない。その折に恣意的に採用された姓の中に Bindulem があったことは間違いなく、その時、姓の採用と同時に Dulem 伝説がドーン・キレクに導入された可能性もある。これにたいして、トドゥアヤイという名前は、これがタイ語であるとしたら「大きないちじく」に敬称の「ト (to)」が付されたものとしか解されないが、パターニー地方に、Raja Tua の伝説<sup>3)</sup>が根強く伝わっていることを考えるならば、むしろ Tua が Dũa になり、その前後に to と yai という敬称が付されたと考えたほうがよさそうである。いずれにしても、二つの伝説の双方とも、最初の移住者の名前を正確に伝えているとは考えられない。

第一の伝説中の下線部分①と史実との対応関係は検討してみるに値する。なぜなら、ソクラー地方を拠点とするタイ側権力とパターニーの地方権力との抗争は、歴史上一度ならず発生しているからである。パターニーの土着権威が最終的にタイ王室の権威に服し、抗争関係が失せるのはラーマ五世 (1868—1910) の御世になってからのことであり<sup>4)</sup>、それまでは、パターニー地方の歴代の rajas とタイ王室との間に紛争が絶えず、幾度か戦闘が行なわれている。<sup>5)</sup> その内でも、17世紀の中頃に生じたパターニーの謀叛 (kabot) はこの地域での数次に及ぶ戦闘を伴ったし<sup>6)</sup>、時代がさがって1840年代にはラーマ三世がパターニーを含む南タイのムスリム圏を攻撃し、1842年には多くのマレー・ムスリムが捕虜となって中部タイまで連れて行かれている。

このようにソクラー地方で幾度か戦われたタイ側とパターニーのマレー・イスラムとの戦闘のどの時が、第一の伝説を語ったインフォーマントの父親から数えて「四、五代前」(下線部分④)の時点に相当するのかははっきりしない。またこの「四、五代前」という記憶がほんとうに正しいのかもわからない。ただいえることは、ソクラー地方にイスラムの影響が及んだのは、1630, 40年頃と推定されるから、それ以後であることは間違いないというだけである。

2) cf. phraraatchabanjat khanaan naamsakun phoo. soo. 2456.

3) Thomas M. Fraser, Jr., *Rusembilan; A Malay Fishing Village in Southern Thailand*, 1960; p. 24.

4) cf. Cakrakrit Naranitiphadungkaan, *Somdetphraaoboromawongthaa Kromphrayaa Damrongraachaaanuphaap kap krasuangmahaathai*, 1963. pp. 259~271.

5) ソクラー地方史の参考資料としては、ソクラー在住の地方史家 Jiamyong soo. Surakitecalanhaan の評論 “songkhlaa nai prawatsaat,” thiao songkhlaa, 1961, pp. 47~132 が、各種の phonsaawadaan や現地での伝誦資料に基づいて書かれていて、いちおう参考になる。その他ソクラー県庁刊行の各種公式文書に短い略史が付されているのも、それぞれ記述が異なっていて参考になる。たとえば、raaingan-khooraatchakaan khong cangwat songkhlaa, phoo. soo. 2506 pp. 1~4 など。また Fraser, Jr. *op. cit.*, pp. 20~29 にも簡単なタイとパターニーとの関係史の記述が得られる。

6) Jiamyong, *op. cit.*, p. 63 には、現在のドーン・キレク所在地から北東に 10 km 離れた地点にあたる samlong というところが、この折の幾度かの戦闘の戦場であったという推論がなされている。

いずれにせよ、この二つの伝説から確認できることは、ドーン・キレク住民の起源を現在地点より遙かに南のパターニー地方のマレー・イスラムに求めることができるということである。ドーン・キレク住民がマレー系人種であってモンやクメールの血を引く南タイ仏教徒と系統を異にしている事実は、かれらと周辺仏教部落の住民との外貌を *physionomy* 的に比較することで容易に確認できよう (写真1～2参照)。



写真1 ドーン・キレク住民の顔 (例1)



写真2 ドーン・キレク住民の顔 (例2)

これらの分析が、南タイ各県に散在するタイ・イスラムのすべてに当てはまるかどうかは、将来の研究課題として残したい。<sup>7)</sup>

## (2) 中央集落の形成

ドーン・キレクは、単一集落よりなるムスリム部落としてはじまった。現在もまだ残っている小川 (*khlong klaang baan* と呼ばれる) のふちに塊村型態をとるささやかな集落形成がなされ、そして粗末な礼拝堂 (*surao*) がその中心に建てられた。

少なくとも百年前までのドーン・キレクが人里離れた熱帯樹林の中であって、外界から孤立して存在したという事実は、現在の住民のきき伝えや、周辺の仏教諸部落の村落形成史などから確認することができる。部落の周辺には虎が跋扈していて、牛や鶏を襲い、時には人間も襲われた。ドーン・キレクの発祥地点がある種の逃避性を感じさせるのは否めない事実である。その逃避は、一つには海からの逃避である。かつて、この地方のタイ側権力の所在地は長期

7) そのほか、直接ドーン・キレクには関係ないが、タイ国南部とマレー文化圏北部との歴史的な接触関係については、次の三書が参考になる。A. Teeuw & D. K. Wyatt. *Hikayat Patani, the Story of Patani*, 1970; R. Bonney. *Kedah, 1771-1821, the Search for Security and Independence*, 1971; William R. Roff (ed.). *Kelantan, Religion, Society and Politics in a Malay State*, 1974.



写真3 ドーン・キレクの所在するあたりの景観。樹林の中に集落があり、それを水田がとり囲んでいる。

にわたって現在のソクラーではなく、サティンプラ（現在ソクラー県サティンプラ郡の郡庁所在地でソクラー県北方海に面して存在する）であった。したがって、海からの逃避はサティンプラからの逃避を意味していたと考えられる。

このようにして成立した初期のドーン・キレクは、自給自足目的で稲作を行ない、同時に零細な菜園栽培を行ない、ココ椰子その他の天然果樹に依存する定着農業型社会であっ

た。家畜としては、牛および水牛そして鶏が比較的初期から各世帯で飼育された。単一集落段階のドーン・キレクはまた貨幣経済にはなじんでいなかったようである。

住民の家屋は、各人の suan 地の中に所在し、それほど密集感はなかった。木造高床式の各家屋は、屋根を椰子の葉 (bai caak) でふき、壁は木の皮ですませ、床および高床の土台には砂糖椰子の樹 (ton taan) が用いられた。また、家の内部を仕切って部屋を作る習慣はなかった。

初期のドーン・キレクと外界とを結ぶ道路はほとんど存在しなかったが、森の中を通り抜ける踏みわけ道ないし水田・畑地のあぜ道をつたうことで、南北両方向にある他の集落との接触は可能であったという。当時の徒歩による交通の道筋の道路網とはほとんど違っている。

ドーン・キレク住民は、成立の当初からイスラムを信仰した。ポノ留学の習慣はなかったが、メッカ巡礼にたいする関心は比較的早期からみられ、時折メッカに行くものもいたという。しかし、道中で不慮の死を遂げる度合が高く、それを怖れて、頻度は途切れがちであった。イスラム文化の中心をパターニーに仰ぐ性向は、ごく初期からみられたという。

このような初期のドーン・キレクについては、二つの重要な問題を考えてみなくてはならない。

一つは、初期住民の日常言語がなんであったかである。現在、パターニー地方の言語がおおむねマレー語のパターニー方言であることはいうまでもない。現在、ドーン・キレクの住民はタイ語のソクラー方言を日常的に使用する。ドーン・キレクがパターニー地方のマレー・イスラムの移住に起源をもつとすれば、一つの謎は、いつの段階でかれらのマレー語にかえて現在のタイ語方言を学習するに至ったかである。一つの可能性は、やはりタイ語圏に身を置いたことから、幾世代ものあいだに自然にタイ語を学習し、マレー語を忘れたという可能性である。もう一つの可能性は、はじめこの地点に移住した住民がそもそもマレー語とタイ語と双方を習得した二言語使用能力 (bilingual) をもっていて、後天的にマレー語の能力のほうが進化したという可能性である。パターニー県とソクラー県との接する地域、たとえばサバーヨーイ、

チャナ、ナータウィーがいまでも bilingual 地帯であることを考えると、後者の可能性のほうがより真実性を帯びているようにも考えられる。

もう一つの問題は、ごく初期のまだ集落規模がそれほど大きくない段階における通婚圏の問題である。ごく少数の世帯しか存在しなかった段階においては、村内にだけ範囲を限ると配偶者選択にある種の困難が付きまとったことはいうまでもなく、近親結婚を避けて本来の生活圏の外の周辺地域に配偶者が求められた公算が高い。その場合、周辺地域にムスリム村落がほとんど存在せず、四方を仏教徒集落に囲まれたドーン・キレク住民が、ある程度仏教徒との通婚を行なったことは想像するに難くない。

## II 派生集落の形成——第一段階

派生集落形成 (“baan-mai” formation) とは、一個の baan が歴史のある段階で別の baan より分岐して、社会共同体的機能の面である程度の独立性を確立するに至る社会過程をいう。集落の分岐独立は、南タイでは土地獲得を契機として自由に行なわれてきた。新集落の分岐を抑制する社会的制約はほとんどなかった。逆に、いったん成立した集落の解消の可能性もそれ相応に無視することはできないが、しかし、解消のほうは事実問題としてさほど考慮する必要はない。

派生集落形成が、土地の細分化を補う一つの適応現象であることについては、別の機会に指摘したので<sup>8)</sup>ここでは改めて解説することを避けたい。ただ、南タイのタイ・イスラム圏の農村が定着農業型社会であり、モスクを中心とする凝集的村落型態をとりがちで、流動化傾向もさほど高くない以上は、集落派生をうながす人口圧力の限界影響力がかなり低かった事実は、ここで改めて指摘しておくに値しよう。すなわち、一つの baan の住民が伝統的に居住耕作する区画は限られており、細分化がある限度に達すると直ちになんらかの形での補完現象が生じなくてはならない。

南タイのタイ・イスラム社会でも、baan はもっとも基礎的な地域集団の単位であり、複数の世帯を含む地縁集団を意味する。<sup>9)</sup>そして同時に、baan は、集団成員の宗教活動のための一つの建造物を中心とする儀礼共同体でもある。その集団的集合のための建造物に注目するならば、baan は、「マサジット (matsajit) 共同体」と「バライ (balai) 共同体」との二種に分けることができる。前者は、いうまでもなく、集団礼拝のためのモスクとムスリム儀礼を司るイ

8) 拙稿「南タイの土地所有」(本誌4巻5号) p. 8 および p. 19 参照。

9) ふつう、タイ語では、baan という一軒の家のことであり、家の集合体としての部落は muu-baan という。タイ国行政法上もこの通常の用語法をとっている。phraraatchabanyat Laksana-pokkhrong-thaonthii phoo. soo, 2457, muat thii 2 maatraa 7 に、行政法上の “baan” と “muu-baan” の定義が得られる。南タイ方言で一軒の家を示すには、本来ならば家の助数詞として用いられるべき lang が使われ、これがおおむね lng あるいは bn となまって使われている。



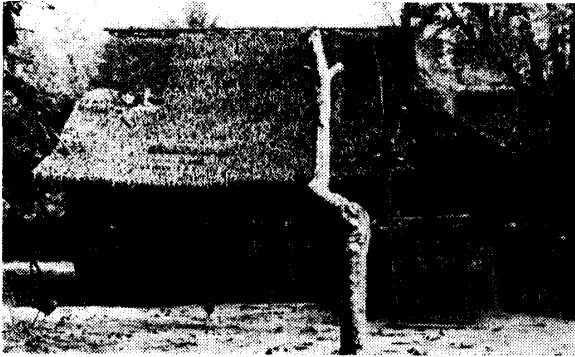


写真4 バーン・ブル集落に残る古い家屋建築様式



写真5 中央（バーン・ヤイ）集落にあるドーン・キレク本来のマサジット

マムの権威を軸とするコミュニティであり、通常は、行政区画の末端区分としての部落 muu-baan と対応する。これにたいして、バライ共同体は、マサジット共同体に内包されながらも、マサジット共同体から分離するには至らず、それで、ある程度の儀礼上の独立性を保っている地域的集団のことである。バライは、タイ・イスラム社会では、マサジットに準ずる格の、集団的集会用の公共建築物のことであり、村落が複数の集落にわかれて成立している場合に、各集落のある程度の独立性の象徴として、宗教活動目的で建造されるものである。

したがって、派生集落形成 (“baan-mai” formation) にも、二つの局面をわけて考えておくことが望ましいということになる。第一の局面は、バライ共同体の分岐であり、これは通常、新集落が旧集落から分岐したあと、構成成員の人口規模があるレベルに達し、バライが建築されることで完了する過程である。第二の局面は、マサジット共同体の分岐である。これは、バライ共同体の成員規模が、成員の意識において一個のマサジットをもち、独立のイマムをもつにふさわしいと考えるレベルに達した場合、あるいは、極端な遠隔地に集落が派生し、近隣のどのムスリム集落とも宗教活動を共にすることができない場合などにみられる現象である。通常は、バライ共同体の分岐は、マサジット共同体の分岐に先行し、いわば後発現象としてマサ

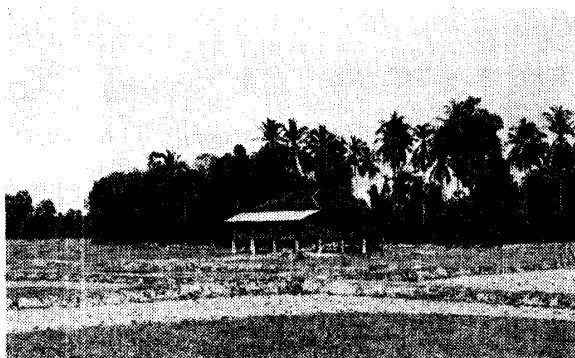


写真6 バーン・ノーク集落のバライ

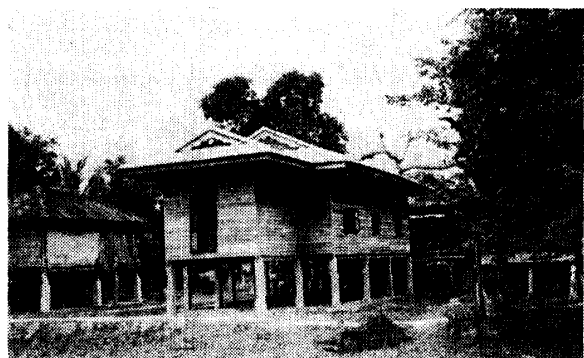


写真7 バーン・コキレク集落のバライ

ジット共同体の独立がみられるのである。

派生集落形成の過程は、要するに二つの社会過程よりなりたっている。まず第一に、新しい土地の開拓によって新しい家屋集落(klum-baan)が形成される過程である。この過程を“klum-mai formation”の過程と呼ぶことができる。土地獲得は、特殊タイ的慣行である「無断耕作」によって行なわれる。「無断耕作」がなされた土地に「出作り」が行なわれ、そこがしだいに日常的居住活動の場と変わることによって新しい klum が形成される。第二の過程は、宗教儀礼分離の過程である。金曜日の集団礼拝をはじめ、毎年のイスラム固有の祭礼は、集団的儀礼として一堂に会して (kaan-chumnum) 行なわれねばならないが、この集団活動を新集落として行なうことによって、独自の宗教的秩序をつくりなす過程である。

ドーン・キレクからいちばん最初に分岐した集落は、バーン・プル (baan phru) 集落であった。<sup>10)</sup> バーン・プルは、現在15戸よりなり、ドーン・キレクではもっとも小規模の集落である。その15戸は中央集落（本来のドーン・キレクを以下このように呼ぶことにする）のマサジットから南東の方向約0.5 kmの地点に所在する。

村民の乏しい記憶からバーン・プルの分岐過程を判断してみると、いまからおよそ70年前に、現存する73才の村民の父の移住にはじまるという。その男は中央集落の両親の家に居住していたが、結婚して一児（その73才の男）をもうけた段階でバーン・プルに無断耕作を行ない、まず出作りの小屋を建て、そしてやがて正式に移住した。この地点は当時は樹林地帯であり、開墾にはかなり手間がかかったという。そして、中央集落の両親の家屋敷は妹によって相続されたという。その後、他の住民によって、中央集落から近接地点への同様なプロセスでの移住が行なわれ、前後十年あまりの間に一つの集落 (a klum) が形成されるに至った。

この最初の移住者の例が暗示するように、中央集落がある程度「密集化」した段階で、ある世帯の末子相続で不遇に処せられる長男ないしそれに準ずる地位のものが無断耕作で遠隔地点に出作りを行ない、新集落形成の端緒を切るのであって、いわば集落自体の密集化、それに伴う一部世帯の土地保有の減少、そしてそこに働く特殊なルールなどの社会経済的条件をあわせ考えてみなければならない。そして、最初の移住がなされても直ちにかなりの規模の集落が形成されるとは限らず、たとえばこのバーン・プルの場合、その現存する73才の男の小児期に移住がなされ、その男が成人して割礼をすませ、この新集落を拠点として結婚を行なった段階で、一つの集落らしい社会的体裁をもち始めたという。その間やはり十年あまり経過している。

中央集落の「密集化」についても吟味が必要である。バーン・プルが分岐した段階での中央集落の家屋数は20ないし30であったという。この段階で中央集落が「密集化」していたといえる前提には、suan 地と宅地とを区別せず、suan 地の内に家を建てて居住するという様式が守

10) 「プル (phru) とは南タイ方言で「森のなかの低地」の意である。cf. withayaalaikhru songkhla: *photca-naanukyom phaasaa thintai*, 1971, p. 375.

られたという事実、それともう一つ、その意味での屋敷地がある程度狭隘化した場合には、それをより細分化するよりは、別の地点に無断耕作により広い土地を求めるほうが好まれた事実とがある。そういう事実を考えると、20ないし30世帯でドーン・キレクが「密集化」したとしても当然であったといえよう。

バーン・プルの分岐について特徴的なのは、分岐の地点決定あるいは方向決定がまったく特別の方向意識なしにいわば偶然的に行なわれていることである。これは、もっと後の段階での派生村決定の場合と対照的に違う点である。また、特定の方向意識なしに派生集落が形成されるからには、たんにバーン・プルだけでなしに、ほぼ時を同じうして、いくつかの違った方向に派生集落が形成されたのであって、それは後に述べる通りである。

バーン・プルについて、いま一つ注目すべき局面は、ドーン・キレクから新しい集落の分岐がなされ、複数集落よりなる部落に変わったあとで、新たに分岐した集落にドーン・キレク以外の部落からの移住がみられるようになり、いわば新集落分岐が本来のドーン・キレク住民ではない異質分子流入の契機として働いたという事実である。単一集落状況での社会関係と複数集落状況でのそれとに微妙な変化がみられることに注意しなくてはならない。

ところで、このバーン・プル集落が、独立した「バライ共同体」として、母集落である中央集落から儀礼分離を遂げたのは、明示的に何年前と示すことはできないが、比較的後年のことであった。バーン・プル集落の戸数は、今日に至るまでせいぜい20軒を越えたことはなく、また中央集落まで徒歩で10分もあれば行きうる近接地点に成立した集落である以上、「マサジット共同体」として分岐することはありえなかった。しかし、マサジットと同時存在的にバライを建築することに社会制度上の制約があったとは考えられない。バライを建築し、固有の宗教的指導者を選出するまで年月がかかった理由としては、家屋数が一定レベルまで増え、バライ建築を必要とした経費を負担できるようになるのに年月を要したこと、また中央集落における人口増でマサジットが手狭になるという付随条件がなかなか実現しなかったこと、それと共に宗教的指導者たるにふさわしいイスラム教育を受けた人物が現われなかったことなどを考えることができる。

最後の点はだいじである。バライ共同体としての baan ではバライの宗教的指導者、つまりバライ指導者のことを“tojii”と呼称する。「偉大なハジー」の意味ではあっても、当人がメッカ巡礼をおえているとは限らない。要するに、正真正銘のハジーに匹敵する格 (thaana) を備えていることがバライ指導者たりうる絶対的条件なのである。

バライ共同体として、独自に行ないうる機能は、イスラムの年中行事の折に、成人男性の祝宴 (kaan-kin liang) やコーランの導唱などを別個に行なうこと、また独自の着想で宗教教育やコーラン学習などを企画しうることなどであり、他方、あくまでもイマムとマサジットに依存しなくてはならないのは、毎週金曜日の集団礼拝とザカート納付などである。バライ指導者は、

イマムの権限を犯さない限りにおいて各自の baan 内で宗教的指導を行ないうるのである。

このようにして、バーン・プル集落の派生分岐は完了した。ところが、バーン・プルの分岐とほとんど時を同じうして、他に三つの baan がドーン・キレクからバライ共同体として派生分岐している。中央集落から南西約 0.7 km の地点に分岐したバーン・ファノン（「寝床の頭の方向の集落」の意）、西方に約 1 km の地点に分岐したバーン・コキレク（「キレクの丘の集落」の意）、中央集落の北方にかなり拡散した具合の複数小集落 (klum) の形成をみたバーン・ノーク（「はずれの集落」の意）の 3 集落がそれである。

これらの集落の派生は、ほとんど同じ時期に、バーン・プルの場合と同様なプロセスで行なわれている。

各集落とも、いずれも中央集落居住者の成人後の移住によって形成が始まっている。そして、ある段階まで至ると、各集落とも「バライ共同体」としての分離を遂げている。このような分離の基盤に働く社会的条件として、一つの集落がいったん派生したあとで、独自の社会関係、とくに血縁関係の独自の組み合わせを内包するに至る事実があることを無視することはできない。

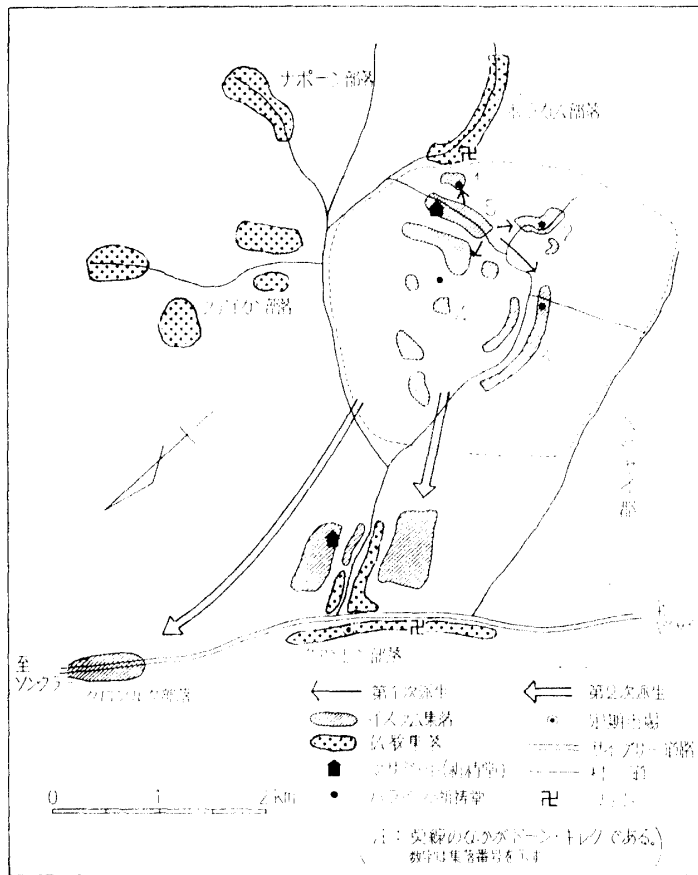


図2 ドーン・キレク周辺集落配置および集落派生概念図



写真8 中央集落（バーン・ヤイ）と他のドーン・キレク内の派生集落とをつなぐ道

このようにして、結局、ドーン・キレクは50年前には、従来の中央集落から分岐した4集落を加えて、5集落よりなる部落に変わった。派生集落形成がなされたことの歴史的意義は甚大であった。第一に、イマムが居住し、マサジットが所在する中央集落の比重が村民の意識において次第に高まることになる。中央集落は、従来はバーン・ドーンキレクと呼ばれていたが、バーン・プルが派生し

て以来、バーン・ヤイ（「大きい集落」の意）と呼ばれるようになる。バーン・ヤイが部落全体で中心的役割を果たすようになると共に、部落行政がバーン・ヤイ優位に傾くことになり、さらには、後にも述べるように諸集落内に村民の意識の上で preference の序列が付く契機ともなった。第二に、先にすでに指摘したように、単一集落段階には事実上困難であった村外からの移住が、派生集落形成とともに容易になった。なぜなら、中央集落の保守的な均質性となじまない分子でも、バーン・プルその他の新集落に受け入れられたからである。

### III 派生集落の成形——第二段階

このような第一段階の派生集落だけでもって、ドーン・キレクの社会圏の膨張はとまるものではなかった。人口圧力その他の理由から、ドーン・キレクは、歴史のある段階でより大きな自己拡大を遂げるのである。

ドーン・キレクからの「飛び村」現象の第二段階は、ドーン・キレク本来の境界を越えて、いわば村外に派生集落が形成されるというかたちで現象化する。この第二の局面は、ドーン・キレク境界内での集落複数化の場合にみられたのとは違った、まったく新しいいくつかの傾向性をみせるのである。さしあたって重要なポイントは、一つには、新しい集落形成の地点がドーン・キレクから距離的にそうとう離れているという事実、もう一つには、ドーン・キレクの社会関係からの離脱が比較的速やかに行なわれ、たんに「バライ共同体」としての分岐であるよりは、むしろ「マサジット共同体」としての分離としてなされたという事実である。

このような派生集落分岐の第二段階、すなわち「派生村」形成の過程には、第一の段階すなわちたんなる派生集落形成とはまったく違った社会経済的事由が関係している。それは、ドーン・キレク内外における社会環境の変化と対応している。

派生村形成をうながした社会経済的事由の第一として、ドーン・キレク内部における集落の密集化を指摘しなくてはならない。これは、ドーン・キレク内部ではもはや新集落形成の余地がなくなったことと、既成各集落の内部的人口密度の高まりを意味する。中央集落 baan yai



写真9 外から見た中央（バーン・ヤイ）集落。樹林および畑地に囲まれ、一つのクルム（家屋集合体）としてまとまっていることがわかる。



写真10 （バーン・ヤイ）中央集落は家屋が密集し、過密化が顕著にみてとれる。家屋の建築様式はかなり新しい様式に変わっている。

の場合にそれは顕著な形をとってあらわれた。すなわち、従来は中央集落においても、宅地 *thiidim baan* の中に小規模の *suan* 地が含まれ、果樹や菜園の中に家屋が建っているという形態がふつうであったのが、宅地と *suan* 地との分離が始まり、それと共に中央集落内部から *suan* 地が消えはじめ、家屋の接近しあう窮屈な集落に変わり始める。この現象は、いうまでもなく、伝統的な家族構成のパターンにおいて、大家族よりも新居住による核家族形成が優位するという傾向性と関係する事柄であった。他の4集落においても、世代の交替と共に、世帯数は急増をみることとなり、内部的密集化をみた。

第二に、ドーン・キレクで同時に生じた現象として、土地をめぐる観念の変化が重要であった。これは、第一の事由と表裏をなす現象であったが、一言でいえば、土地を有価物件 (*sap-sombat thii mii khaa*) として意識する観念の発生である。部落のある古老 (Inf. A) の言葉によると、「昔は土地は親類の者 (*luuk phii luuk noong*) にただで呉れてやった。いまでは、兄弟でさえ、買わねばならない」。かつて、土地保有 (*thũukhrøong*) の観念がなかったわけではなく、その観念は厳密であった。しかし、土地を売買取引の対象と考える習慣はなかった。

土地をめぐる観念のこのような変化をもたらした現実的の事由は三面的に捉えることができよう。まず、世帯数の増加に伴う土地の細分化が生じたことである。次いで、農業経済面での変化として、従来は自給自足目的の菜園でしかなかった *suan* 地保有が、ゴム栽培の歴史の開始とそれに果樹や畑作物、とくに、きんま葉 (*phluu*) が商品価値をもちはじめたことなどによって、にわかに重要性を高めたことである（ドーン・キレクでゴム栽培がはじまったのは、およそ60年前であり、アロールスター——サイブリー——の市場を訪ね、価値の高さに驚いた部落民によって導入されている）。もう一つには、人口増とともに、部落全体としての水田の絶対面積がにわかに過少になったことがあった。ドーン・キレクの稲作が、かつては肥料を用いる習慣がなく、品種の多様化も改良もなかったために、きわめて不安定であったことは、現存す

る村民の多くが指摘することである。従って、稲作の生産性の低さから、ひじょうに大規模の水田保有が求められる段階があった。それだけにある程度の人口増でドーン・キレク内部の水田面積は過少なものとなりえたのである。いずれにせよ、このような三面的な社会経済的变化によって、土地の価値をめぐる観念は急激に変化することとなり、昔日の土地保有を特徴づけた気持ちは消え失せることになった。

第三に、貨幣経済が浸透したことを、派生村形成のもう一つの要因としてあげねばならない。派生村が部落外に形成される以前に、ドーン・キレク住民が商品経済と関わりをもっていたことは、古老の話で確認できる。豆類、芋類、きんま葉などをソクラーの町の市場で現金に換え、布、魚などを求めて帰る習慣があった。多額の現金を求めるには、アロールスター（サイブリー）まで牛をひいて行ったものだという。ゴム経済の到来と共に、都市の市場としての意義は高まり、とくに二つの都市（部落からそれぞれ15 kmの距離にある）、ハジャイのゴム市場としての発達<sup>11)</sup>とソクラーの行政中心地としての役割は、ドーン・キレクの農民をしないで外界との頻繁な接触に導くようになった。このことは、住民の意識を急激に変化させ、外界忌避性向を薄れさせ、以下に述べるように特定方向に派生村を形成させる契機となったのである。<sup>12)</sup>

このようにしてみると、派生村形成の第二段階が、かなりの度合、ドーン・キレク外的要因によってうながされていることがよくわかる。そのために、新たな派生村形成は、次のようないくつかの特徴をみせるのである。

まず、第一に新集落形成の方向が、特定方向に特化する。ドーン・キレクの北方、すなわちソクラーとハジャイとを結ぶ国道（サイブリー道路）の方向にのみ限られてくる。ドーン・キレクから北方およそ4 kmの地点すなわち国道への出口の地点に二つの派生集落が作られ、さらにその地点から国道ぞいにソクラーの方向に1 km行った地点にもう一つの派生集落が形成される。それぞれ、現在のクアンヒン部落とクロンルク部落である。

それらの地点での新集落形成をうながした決定的な要因は、ドーン・キレクと二つの派生集落が形成された地点、すなわち国道とがおよそ40年前に比較的良質の道で結ばれたことであった。それまでは熱帯樹林のなかの踏みわけ道であった。そのことによって、第一段階の集落派生と比べると、かなり遠距離に集落が飛んでいる。この距離の遠さが第二の特徴といえよう。

11) ハジャイ市 (haat-yai. 1967年内務省統計によると人口49,327) は現在南タイ随一の物資集散地として、タイ国第4位の大きな町になっているが、この町は70年前には、川に面してありふれた舟着き場をもつだけの寒村であり、ゴム経済の発達とマレー半島縦断の国際鉄道の敷設によって、近年にわかに発達したという歴史をもつハジャイの住民は9割以上が華僑である。

12) ドーン・キレクが貨幣経済と急激になじむに至った歴史的契機として、1941年にはじまる日本軍のソクラー進駐を指摘する村民は多い。日本軍による食料品現地調達および軍用飛行場建設その他の目的での現住民の労務使用は、軍票その他の貨幣と村民をなじませる効果を働き、ドーン・キレクの経済生活は革命的な変化を遂げたようである。

第三に、新たに集落が形成された地点には、少数だとはいえ、先住者がおり、それらはおしなべて仏教徒であった。すなわち、仏教徒が無断耕作で土地獲得を行ないつつある地点にドーン・キレク住民が同様に土地獲得を行ない、異教徒との混合居住を忌避しなかった点が注目値する。この点については、あとでもう少しくわしく分析してみたい。

第四に、先程も指摘したように、独立の「マサジット共同体」として母部落であるドーン・キレクからの分岐が比較的積極的に行なわれた事実である。この点について、少し詳細に立ち入ってみておこう。

すなわち、第二段階の派生村分岐の場合、それが比較的遠隔の地点に派生することから、社会関係の面で、旧集落とのつながりが早期に稀薄になりやすい。そのことを端的に象徴するのが、「マサジット共同体」としての独立である。これは、以下の諸条件が満たされた段階で独自のイマムの選出とマサジットの建造がなされることによって行なわれる。

一つのイスラム部落から一派生集落が「マサジット共同体」として独立するためには、いうまでもなくイスラム特有の規定に合致した条件を備えなければならない。南タイのイスラム圏での通念によれば、分離独立が許される条件は次の四つであるとされる。

- (1) 独立しようとする部落は母部落から300ソーク<sup>13)</sup>以上離れていなくてはならない。
- (2) 独立しようとする部落は40世帯以上よりなり、しかも村落の形状は一つのまとまり(klum)をみせていなければならない。
- (3) 住民のなかに、少なくとも一人は、アラビヤ語ができて、コーランの導唱ができるハジールがいなくてはならない。
- (4) 母部落のイマムの同意が得られなければならない。<sup>14)</sup>

この四条件のうち、第二の条件はいわゆる「カリヤ(khariah)」成立の規則に基づくものである。「40世帯」の解釈は文字通り40以上の世帯で部落が構成されるという意味であるが、ドーン・キレクの場合、その条件が厳密に守られているとはいえず(30以上でもいいという)、分離独立にはかなり便宜的判断が加味されているように見える。

しかし、この四つの条件が整うことは必要最低限度の条件ではあっても、実際上は、ただそれだけで分離独立が挙行されるとは限らない。なぜなら、「マサジット共同体」としての実質的体裁を整える決定的な条件がマサジットの建築であり、これがそうとうに費用がかさむ困難な課題であるからである。「マサジット共同体」分離が、経済的現象としての局面をもつことを見落としてはならない。

13) 「ソーク(sook)」は、長さを測る単位であり、1ソークは約30cmに相当する。本来は「ひじから手までの長さ」の意である。タイ語としては古語に属するが、南タイでは日常的に用いられている。4ソークで1ワー(waa)となる。

14) ただし、イマムの同意が得られなくても、他の条件が整っている場合には、分岐が可能であるとされている。



母部落からの分離独立は、おおよそ次のような過程で行なわれる。まず、分離を行なう部落の有志がそれを決意し、部落の会議 (pracum) で住民の合意を求める。住民の合意が成立した段階で、マサジット委員会 (kammakaan matsajit) が選ばれ、母部落のイマムとの交渉にあたりると同時に、マサジット建築の全過程を管轄する。建築費は、基本的には住民の献金 (tambun) に依存し、必要に応じて前後四、五回あるいはそれ以上全世帯が献金を行なう。献金額は各世帯おしなべて画一的であるが、貧困家庭の場合は、半額などの特別支払いが認められる。時には、郡役所より地方発展税の還付により数千バーツの援助を求めうることもある。また、他部落より献金を求めることも可能である。建築は村民のうちの一ないし三人程度の専門大工がこれに有給で専念するが、住民中成人男子は、一組三人の「カナ (khana)」に組織され、交互に無償で労役奉仕を行なわなければならない。

マサジットの建築が進み、屋根が完成した段階では、事実上分岐が可能になる。その段階で、イマムの選出が新部落の成人男子の互選（投票は行なわれない）により行なわれる。そして、マサジットが未完成の段階で、適当なタイミングが選ばれて分岐独立が行なわれる。それを正式に確認するための特別の儀式は行なわれず、金曜日の集団祈禱が、ある週から新しいマサジットで別個に行なわれ始めることによって、自動的に分岐が完成する。マサジットの建築に相当な期間が必要とされる以上、この全過程が完結するのにも、最低二年はかかると考えられている。

第二段階の派生集落としてドーン・キレクから分岐したクアンヒン部落とクロンルク部落の双方が、それぞれ「マサジット共同体」としての分離独立を遂げている。以下で、この二部落の特徴について、具体的なデータをあげながらくわしく分析を加えてみたい。

(以下12巻4号)